

7. 兵庫県教育委員会『年ノ神古墳群』兵庫県文化財調査報告第234冊 2002年
8. 兵庫県教育委員会『貝谷遺跡』兵庫県文化財調査報告第236冊 2002年
9. 前掲註1
10. 前掲註7
11. 兵庫県教育委員会『和田神社遺跡』兵庫県文化財調査報告第238冊 2002年
12. 龍野市教育委員会『長尾・小畑遺跡群』龍野市文化財調査報告21 1999年

第3節 年ノ神遺跡・大二遺跡出土の把手付広片口鉢と兵庫県下の新資料

1. 本遺跡出土の把手付広片口鉢について

本調査で出土した把手付広片口鉢は、遺存状況の悪いものも含めて4点を数える（年ノ神遺跡出土7・15・45、大二遺跡出土75）。出土した殆どが把手部とされる部分で、全体の形態を復元するには困難だが、恐らく卵形の平面形を呈するものと考えられる。また、体部は全体を丁寧なヘラミガキ及びイタナデで仕上げる他、内面に赤色顔料の付着が見られるものがあった。特に、大二遺跡出土の資料（75）は器体内にまで赤色顔料が浸透している状況が観察できた。さらに、体部外面は僅かながら二次焼成痕跡も見られた。

把手付広片口鉢については、兵庫県大山遺跡、大阪府巨摩遺跡などの出土例が早くから知られていたが、福岡県辻垣遺跡の調査例（柳田康男氏呼称の「広片口三耳鉢」）を切っ掛けに、赤色顔料、特に水銀朱の使用との関係が指摘された。その後、香川県太田下・須川遺跡、同県上天神遺跡、徳島県名東遺跡、福岡県須玖永田遺跡、佐賀県寄吉原遺跡など出土例が増加し、その広がりが弥生時代中期後半～弥生時代後期前半の近畿地方から九州地方を結ぶ瀬戸内沿岸地方という、かなり限定された時期の限定された地域に分布する事が明らかになってきた。

特に香川県上天神遺跡では80個体以上が出土し（報告では「把手付広片口皿」と呼称）、その出土点数は群を抜いている。報告では、上天神遺跡の出土例の多くは体部内面に赤色顔料の付着が見られ、分析の結果、分析対象23個体の内19個体が水銀朱であり、資料の中には「粘土接合部の細かい亀裂に沿って」土器の器体内にまで赤色顔料が浸透しているものもあるという。その機能については「液状化した赤色顔料の使用に関わる」「専用具として特殊化した」ものと位置づけた上で、朱の製造過程での最終段階、あるいは製造後顔料を使用する過程での使用を想定している。

本遺跡出土のものは、上天神遺跡出土のものと類似しており、同様の機能を持ち合わせた遺物である可能性が非常に高いが、それ以外には水銀朱に関わる遺物、例えば石杵・石臼等の朱の製造に関わるもの、あるいは内面朱付着土器と呼称される大型鉢類等の朱の流通に関わると考えられているものは出土しておらず、遺構からも朱の痕跡は確認できなかったため、実際の使用を裏付けるまでには至っていない。しかし、本遺跡が水銀朱の産出地ではない播磨にあって、朱の製造の最終工程あるいは朱の使用（消費）に密接な関わりを持っていたことは、把手付広片口鉢自体の特殊性と、把手付広片口鉢が播磨の弥生時代の遺跡で普遍的に出土するものではないことから明らかである。

それでは、なぜこのような特殊な遺物が本遺跡で出土するのであろうか。そこには、水銀朱の供給とその入手に敏感となる必然性を持った集落立地であったことが考えられる。年ノ神遺跡・大二遺跡はともに加古川の支流である美囊川が形成した平野に南面する段丘上に立地し、本流の加古川にも比較的近い。加古川は低分水嶺を結節点として上流域で由良川とつながり、古来より活発な交流及び物流を促す

道として知られている。また、特に弥生時代においては、この河川ルートに沿って銅鐸や銅剣等の青銅製文物が流通したことも分布状況から明らかとなっている。年ノ神遺跡はこの加古川本流と美嚢川の合流地点という、河川ルートを介した物流の要衝となる地に隣接しており、周辺には恐らく現在確認している遺跡以外に複数の弥生遺跡が点在していたと推測する。これらの集落は、集落共同体として有機的な関係を保持しながら、祭祀等についても執り行ったのではないかと考える。それは、両河川の合流地点を見下ろす位置にある正法寺山から中細型銅剣が発見されたことを見ても、この地に武器形祭器としての銅剣の入手に介在する首長権力の存在、または首長を中心とする集落共同体の存在が想定されるからである。そして、銅剣等の入手と共に、祭祀に関わるものとしての朱の入手にも触手をのびしたものと考えられる。年ノ神遺跡・大二遺跡は、このような共同体を担う集落の一つとして、主に朱の製造及び使用に関わった集落であったと考える。

また、朱の入手については、大和や阿波などの産出地を考える中で、把手付広片口鉢の分布などを考えると後者との交流が自然だが、出土遺物にはその地域のもは出土しておらず、入手過程で在地（播磨）の集落が介在していたとも考えられる。例えば、加古川下流域に立地する溝之口遺跡からは、朱の製造過程で使用したとされる「L」字状の石杵が出土しており、このような加古川流域の拠点集落が、他地域（主に瀬戸内地域）との流通ルートを掌握していたのではないかと考える。

2. 兵庫県下の新資料について

今回の資料整理を進めていく過程で、把手付広片口鉢のその形状から、これまで調査した弥生時代の遺跡の資料中にも、あるものは気づかず、あるものは異形の遺物として報告した可能性もあると考え、既に報告された遺跡（兵庫県調査分）で、特に西播磨地域（主に龍野市周辺）について調べたところ、1点のみ確認できた。

遺跡は龍子向イ山遺跡〔兵庫県文化財調査報告第51冊〕（龍野市）で、遺物は把手部のみが残存していた（遺物報告番号109）。報告では不明としながらも、把手の可能性を指摘している。

本資料は、遺跡の立地する東西に伸びる同一丘陵上の北東側に、養久山・前地遺跡（龍野市）が隣接する。養久山・前地遺跡では、竪穴住居から水銀朱の精製に関わる遺物として石製の臼が出土している。このことは、朱の製造及び使用に関わる遺跡として、双方の集落の意味づけを補完するばかりでなく、朱の製造そして使用といった一貫した工程を共同体内で行っていることが明らかになった。

参考文献

福岡県教育委員会『辻垣畠田・長通遺跡』椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第2集 1994年

石野博信『古墳文化出現期の研究』 1985年

香川県教育委員会他『上天神遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告第6冊 1995年

兵庫県教育委員会『龍子向イ山遺跡』兵庫県文化財調査報告第51冊 1984年

龍野市教育委員会『養久山・前地遺跡』龍野市文化財調査報告第15冊 1995年

加古川市教育委員会『溝ノ口遺跡発掘調査報告書Ⅰ』加古川市文化財調査報告第10冊 1992年

種定淳介「加古川と由良川－モノの移動について－」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ 生産と流通の考古学』

横山浩一先生退官記念事業会 1989年